

2023 年度

AMDA モンゴル 内視鏡技術移転事業/救命救急研修

AMDA モンゴル内視鏡技術移転事業ならびに救命救急研修が 6 月 27 日～7 月 9 日まで日本モンゴル教育病院を中心に実施されました。

【内視鏡技術移転事業】

今回で 5 回目となる内視鏡技術移転事業は、本年度も小倉記念病院消化器内科主任部長白井保之医師、AMDA 理事 佐藤拓史医師により、モンゴルの医師免許の下、実施されました。今回モンゴル側から最も期待された治療は、モンゴル初の内視鏡的硬化療法結紮術併用療法 (EISL) でした。日本から必要な器具・薬剤を持ち込み、モンゴルの内視鏡医とともに行いました。know-how (検査に必要な物品、準備の手順、手技のイロハ) を伝えながら無事に治療を終えました。術者だけでなく介助も技術と経験が必要であり、多くの医師が新しい治療に興味津々でした。モンゴルの医師の内視鏡技術は急速に成長しており、この内視鏡治療がモンゴルにおいても普及する手ごたえを感じました。



吐血患者の緊急内視鏡の対応、緊急 ERCP (胆管ステント迷入と結石による閉塞性黄疸) なども含め、今回行った内視鏡治療は、以下の通りです。

内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) 5 例

食道静脈瘤に対する内視鏡的硬化療法結紮術併用療法 (EISL) 9 例、

胃静脈瘤に対する内視鏡治療 (ヒストアクリル) 11 例

内視鏡的静脈瘤結紮療法 (EVL) 3 例

内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)1 例

いずれも問題となるような合併症なく治療を終えました。

今回の研修の実績をもとに、日本モンゴル教育病院の
アディルサイハン病院長とも今後必要となる医薬品、デ
バイスの導入について、検討を行いました。

また、外科、病理とのカンファレンスでは白井医師より、
点墨やマーキングの大切さを講演しました。



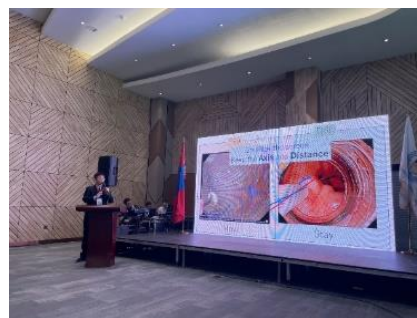
毎回、恒例となっている佐藤医師によるシミュレータ
ーを用いた下部消化管内視鏡の挿入トレーニングには、
実際の感覚を身に着けるために若手の医師たちが毎日、
交互に何度も挑戦しました。夜遅くまで残って指導を受
ける医師も多く、一人ひとりに対して、丁寧に指導を続
けました。熟達度をお互いに共有し合う姿勢から技術の
向上が始まると思わせる研修でした。



【学会発表】

今回のもう一つの大きな目的は MDDW (Mongolia
Digestive Disease Week) への参加でした。白井医師は、
食道静脈瘤や胃静脈瘤に対する内視鏡治療と早期食道癌
や胃癌に対する治療 (ESD) について、佐藤医師は消化
管出血の合併症と新しい治療について講演しました。

この講演で発表した日本での治療法を今回のモンゴル
での治療でも実施しました。引き続き、内視鏡治療に関し
ては、モンゴル側とオンラインのカンファレンスを、行
い、治療後の経過や追加治療の方針について話し合いを
行っていく予定です。



【日本モンゴル教育病院消化器内科部長 Tsogt-ochir Byambajav 医師からのメッセージ】



先ず最初に AMDA、佐藤拓史先生、白井保之先生、AMDA 職員、難波妙さんに心より感謝申し上げます。

AMDA、モンゴル国立医科大学、日本モンゴル教育病院合同事業として、佐藤先生、白井先生、難波妙さんを迎えて内視鏡技術移転事業が 2023 年 6 月 28 日から 7 月 7 日まで日本モンゴル教育病院で実施されました。今回のこの事業実施に当たっては、AMDA から 70 万円相当の内視鏡機器と医薬品を支援してくださいました。この協力により、20 人以上の消化器疾患に苦しむ地元の方々に内視鏡治療 (EISL、EVL、ESD、EMR、ERCP) を提供し、無事に終えることができました。

特筆すべきは、モンゴルで初めて、食道・胃静脈瘤の患者 9 人に対する EISL (食道胃静脈瘤硬化療法) 治療を成功させたことです。(食道胃静脈瘤は、モンゴルにおいて、最も懸念される問題の一つです。) AMDA の皆さんは、この治療の将来的な実施についてアドバイスと提言を下さり、現在モンゴルでは入手できない必要な医薬品や内視鏡デバイスをモンゴルに導入するための実現可能な方法もともに探りました。さらに、理論に基づいた臨床実習、シミュレーターを使った実習、外科・病理部門との合同カンファレンス、救命救急医へのセミナーと実習は非常に効果的でした。



また、モンゴル消化器病学会とモンゴル消化器内視鏡学会が主催する Mongolian Digestive Disease Week Conference では、佐藤先生と白井先生が基調講演者としてご登壇くださいました。緊急内視鏡、EISL、早期消化管腫瘍の内視鏡的切除 (ESD) の革新的な技術などのテーマで講演をしてくださいました。

私たちは、日本の皆様、AMDA、佐藤先生、白井先生、難波妙さんに心から感謝の意を表します。皆様の寛大さ、専門知識、リーダーシップ、創造性、親しみやすさ、そして人間性は、卓越しており、私たちは学び、大いに刺激を受けております。いつでも、どこでも、どのような形であれ、必要とされる支援を提供し続けることができるよう、皆様の人道的活動における益々のご活躍をお祈り申し上げます。

ビャンバジャブ・ツォクト・オチル医学博士

内視鏡センター長

モンゴル国立医科大学モンゴル・日本病院 内視鏡センター長

モンゴル国立医科大学 消化器肝臓科部長

【小倉記念病院消化器内科主任部長 白井保之医師からのメッセージ】



私は今回 2 回目の参加となりました。前回の参加した際に、モンゴルには肝硬変に伴う食道胃静脈瘤の患者が非常に多いが、我々が日常で行っている治療がされていないことを知りました。今回の一番の目的は静脈瘤の治療を紹介することでした。モンゴルの全国学会で治療について講演を行い、実際に治療を行うことができました。初めは私が治療しましたが最後はモンゴルの医師だけでも治療ができるようになっていました。

今後モンゴルにおいてデバイスと薬剤が承認され、普及していくことを願っています。

学会での講演や実際の治療の機会をいただいたのは AMDA のこれまで築いてきた信頼関係あってのことでした。

また、我々が当たり前に行っているがモンゴルでは行われていない治療もいくつかありました。その一つが内視鏡的に行う点墨というマーキングでした。内視鏡技術を教えに行くというスタンスは必要ですが、実際に現地みて、何がされていて何がされていないのかを肌で感じるにより、必要とされている医療を提供できると実感しました。

内視鏡技術移転事業を継続することによりモンゴル、日本両国がさらなる高みを望めるものと思います。そして、私自身の日本での日常診療への刺激となっています。

【救命救急研修】

2017 年よりコロナ禍の 2 年間を除いて、AMDA 理事、佐藤拓史医師の救命救急研修を毎年実施しています。今年も、7 月 3 日にモンゴル国立鉄道病院で、7 月 5 日に日本モンゴル教育病院で実際に救急の現場で活躍する医師を対象に行いました。

モンゴル国立鉄道病院は、モンゴル国内の鉄道の駅近くに 27 カ所の支部の病院があり、診療対象となる職員とその家族の全体人数は約 16000 人を超えます。健康保険制度の見直しに伴い一般の人も受診するようになりました。ウランバートルにある本部の病院の病床数は 300 床。9 月から新病院の建設が始まります。病院列車もあり、モンゴルの 21 ある県のうち 8 県を巡回しています。今回、同病院において、22 名の現場医師の参加の下、FAST（外傷の初期診療における迅速簡易超音波検査法）と骨髄輸液のセミナーが実施されました。



次回は是非、佐藤医師に実際に診療列車に同乗して研修を行ってほしいとの依頼がありました。



また、7月5日に行われた日本モンゴル教育病院で行われた研修にも23名の医師が参加しました。

【駐モンゴル日本大使館表敬訪問】

7月3日、白井保之医師、佐藤拓史医師、AMDA職員難波妙は駐モンゴル日本大使、小林弘之大使を表敬訪問しました。医務官の伊東先生もご同席くださり、今回の活動についての報告、そして今後の活動についての見通しなどについて説明をいたしました。小林大使からは、大使館としての協力について、AMDA側からの提案を聞いてくださり、モンゴル人が「この治療は本当に必要」と賛同するように働きかけていくことも大切とご教示をいただきました。



在モンゴル日本国大使館 小林弘之大使（右から二番目）伊東貴雄医務官（左端）

【国立鉄道病院副院長、バトウ نداラフ先生からのメッセージ】



私は、2011年以降、AMDAと活動を共にしています。当時、モンゴルはウランバートルに救急医療トレーニングセンターを設立しました。また、地震で被災した国々での医療専門家の研修や雇用など、多くの人道的活動が大規模に行われました。フィリピンの台風や日本で地震があったとき、モンゴルの医師たちがAMDAとともに現地で働き、多くの人々を助けたのは、もう遠い昔のことのようです。ウランバートルエマージェンシーサービス103は10年以上もの間、医師や看護師、ドライバーへの救急研修を組織することで、モンゴルの専門家の能力向上に大きく貢献してきました。AMDAの菅波代表や難波妙理事、救急のセミナーをこれまで行ってくださった佐藤先生に感謝の意を表したいと思います。現在、モンゴルには、この分野で研修を組織する多くのNGOがあります。私個人としては、AMDAがこの原点を作ったと思っています。

すべての善行が広がることを願っています。

【2023年モンゴル事業を終えて】



2017年9月、あれから6年、新型コロナ感染症などを乗り越えて、モンゴルの内視鏡も救命救急もいずれもモンゴルの医師たちの努力で、その技術力は格段に向上していることを今回の事業で大きな手ごたえとして感じています。これまで、限られた時間の中で常に現場からの要望に応えながら、共に学び共に救うという姿勢で日本の医療技術を共有してきました。今回も様々な場所で、かつて研修を受けたという医師たちが私に声をかけてくれ、自らの進歩と現状を伝えてくれました。このことは私にとって何よりの喜びであり、次に繋がる大きな励みとなります。このモンゴルでの事業にご支援をいただいている多くの皆様に心からの感謝とともに以上、報告いたします。

AMDA理事 佐藤拓史 2023年8月